ＰＴ調査を用いた長野都市圏における交通特性の変化に関する研究

令和３年２月　渥美　拓海

要旨

目的

１日・１人あたりの平均トリップ数を表す生成原単位は、将来交通需要を推計する際に用いられる重要な指標である。生成原単位の差異は需要予測に大きな影響を与えるが、将来にわたって大きな変化はないものと仮定して用いられてきた。しかしながら、十数年前と現在では社会情勢が変化しており、見直す必要があると考えた。そこで本研究では、長野都市圏におけるここ十数年間の様々なカテゴリーの生成原単位の変化について分析を行い、その要因となる交通特性を明らかにした。

方法

本研究では、長野都市圏域で行われたパーソントリップ調査(2001 年度、2016 年度実施)を基に、性別・年齢等の個人属性データ、移動目的・交通手段等のトリップデータを抽出した。これらのデータから各年度で個人属性別に生成原単位を求め、二時点間の比較を行った。さらに、目的別と年齢階層別の交通手段分担率を調べ、生成原単位との関係性を分析した。

結論

長野都市圏における生成原単位はここ十数年の間に多様な変化が見られた。年齢階層別にみると、生成原単位は高齢者で増加し、その他の年齢階層では減少した。職業別では、学生と就業者で減少し、無職者で増加が見られた。さらに、世帯構成のうち単身者世帯と複数人世帯の間で生成原単位の値に差がなくなった。また、自動車の分担率の増加に伴って生成原単位が増加することが明らかになった。

今後はさらなる分析を重ね、生成原単位の変化に関わる詳細な要因を明らかにする必要がある。そして、将来交通需要予測の精度向上に繋げ、適切な交通計画の策定を行うことが不可欠である。

指導教員　高瀬　達夫　准教授